



## シスターのぶどう畑

### 釜石でのボランティア体験

シスター岸 里実

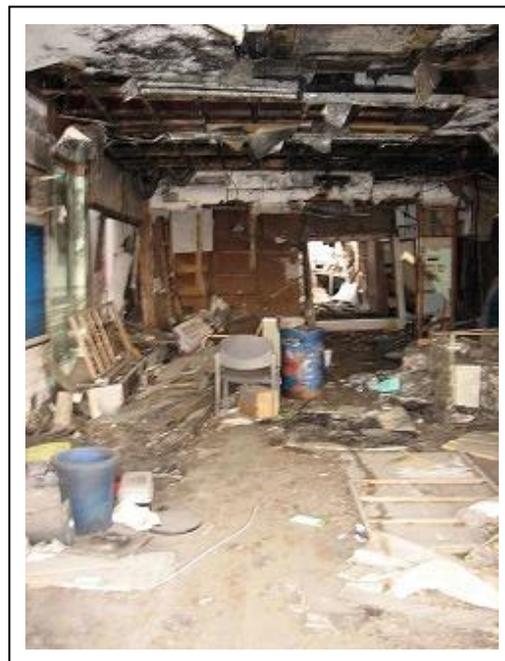
9月12日の夜10時ごろ、わたしは東京の繁華街を横目で見ながら、大きなリュックと寝袋を背負って歩いていました。夜行バスの乗り場のある池袋は、多くの若者や勤め人でにぎわっていました。その人込みの中、やがてわたしと同じような荷物を抱えた人々がぼつぼつと姿を現し、わたしは上智大学の奉獻生活者の仲間と合流しました。

わたしたち8名は夜行バスに乗り込み、約9時間のバスの旅へと出発しました。向かう先は岩手県釜石市にある、カリタスジャパンのベース・キャンプです。ちょうど前日の11日は震災から半年の節目に当たっており、被災地では追悼の祈りが各地で行われているようでした。この半年で、被災地はどのように変わったのだろうか。今何が必要とされており、わたしに何ができるのだろうか。あの壊滅的な津波の情景を思い浮かべながら、わたしはバスのシートで眠りにつきました。

翌朝まだ夜明けごろに眼が覚め、バスのカーテンからそっと外を覗くと、広々とした緑の大地が目飛び込んできました。実った稲穂や、田舎の素朴な家の佇まいが広がり、昔話の世界に入ったような美しい情景でした。岩手県の遠野にバスはさしかかっていた。まるで震災などなかったかのような穏やかな内陸部の様子を目にし、わたしは夢でも見ているような気分でした。

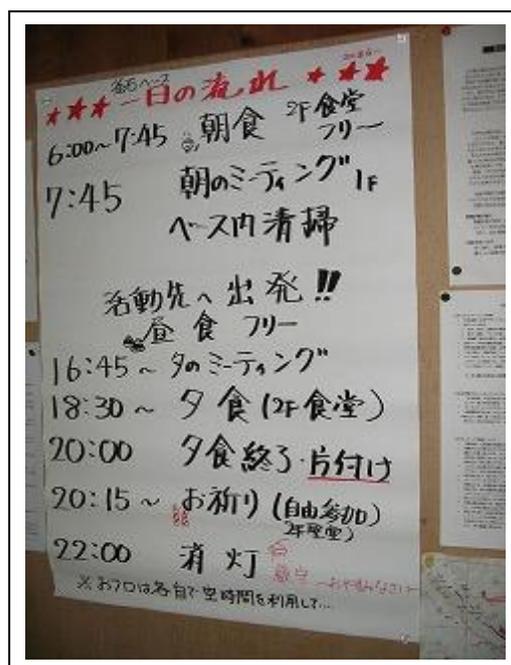
やがてバスは終点釜石駅前に到着し、わたしたちはバスから降りました。カリタスから迎えの車が来ており、荷物を預けるとベースまで歩きました。ざっと見渡す景色は、整備された後で、何事もないように思われました。けれども注意深く見ると、足元の敷石が剥がれたり割れたりしており、本来真っ直ぐであるはずの鉄橋が曲がっているのを目にしました。さらに歩いてゆくと、商店街が近付くと被害がよくわかりました。通りのどの家も津波のために一階部分が筒抜けになっており、アーケードの天上まで汚れの後が見えました。さらに判別がつかない瓦礫で一杯になった家々があり、そのよう

な建物は赤い旗が下げられていました。これは「このまま取り壊し」という印なのだと教えていただきました。



ベースキャンプに到着すると、わたしたちは朝食を済ませて、朝のミーティングに参加しました。朝のミーティングでは各自の仕事の確認と、今日到着したメンバーの紹介、出発するメンバーの挨拶があり、司祭による祈りで派遣されます。わたしたちがいる期間は、だいたい30名前後のボランティアがおり、信者もそうでない人もいました。九州から来た大学生、社会人、主婦の人など、年齢や出身、職種や国籍も様々な人々が、ボランティアと言う共通の目的のため一緒に寝食を共にしました。

カリタスのボランティアはリピーターが多く、二度も三度も来られている方が少なくないとのことでした。



### 釜石教会

手前にある信徒会館が全面的にカリタスジャパンのベースとして解放されており、奥のお御堂のある二階建ての建物の二階が聖堂、一階が被災者のためのお茶と交流のボランティアの場となっています。

津波の時はこの右手すぐ下の駐車場まで瓦礫の波が押し寄せましたが、教会の建物そのものは被害を受けませんでした。

初日のわたしの仕事は、「フィリア天神」という、仮設住宅での喫茶コーナーの手伝いと、その仮設住宅訪問でした。ベースから歩いていけるところに、震災時に既に廃校になっていた中学校があり、グラウンドに仮設住宅が作られました。その一角の集会所でカリタスによる「お茶っ子サロン」が週に二度開かれます。

サロンではおなじみの方や声をかけて立ち寄っていただいた方に、お茶・コーヒーのサービスをし、救援物資を配ったりします。生活物資そのものはほぼ行き渡っており、震災直後の食料不足は解消されていました。けれどもこれから冬を迎えるとのことで、冬物の下着やコート希望される方がありました。

仮設住宅は、これからの厳しい寒さに備えて、二重窓や扉の工事が行われていました。テレビや冷蔵庫、洗濯機などの電化製品が備えつきで、避難所の生活を思えば一応整えられた環境です。しかし、お年寄りの孤立化、トラウマを含めた心の問題、見通しのたない将来設計への不安など、問題が見えないところに広がっている分、容易に解決できないと感じさせられました。命が助かったことに素直に感謝する段階から、これから生きてゆくという段階に移り、それぞれの抱える苦しみや疲労が高まりつつあるそうです。

わたしたちが「お茶、いかがですか?」と声をかけると、「ありがとう」とにこやかに対応して下さる方でも、心の深いところでは重荷を負っておられるのだと思うと、複雑な気持ちになりました。



一日の仕事の後で、ミーティングが再び行われました。そこでは一日の出来事の報告を含め、小グループになって分かち合いがあります。ボランティアの心の健康を保つ為にも、こうした取り組みは欠かせないのだと教わりました。

わたしたちはベースキャンプで、「ここはどこ?」と思われるくらい、明るく賑やかに、冗談を言ったりして過ごしました。ベース全体が家庭的な雰囲気になり、初対面の人でも受け入れあう気持ちのよい共同体でした。ボランティアであっても、時には背負いきれない緊張を抱える状態に置かれて、このようなほっとする場をつくるのが何よりも大切なのだと実感しました。

夕食や朝食はシスターズ・リレーで来られたシスターが準備して下さいました。ベースの雰囲気作りに、シスター方が大きな貢献をしておられます。ここでは皆ベールを外し、修道服を身につけていません。それでも未信者の若者たちからも「シスター」と慕われて、手が空いたら台所を手伝うボランティアの姿もよく見ました。

夕食の後は近くの銭湯へ歩いて行き、一日の汗を流します。仕事の疲れをほぐし、ベースに再び戻り夕の祈りに与りました。この夕の祈りと朝のミサは、自由参加になっています。

夕の祈りの後は、おしゃべりをする人、カードゲームで盛り上がる人など、まるで合宿所のような雰囲気でもありました。けれども、10時には完全消灯です。寝袋を広げて、女性は12畳の部屋で、12名が雑魚寝でした。疲れもあり、ぐっすり朝まで熟睡しました……。

翌朝は六時のミサに与り、朝食の後、昼食のためのおにぎり作りを各自がしました。自分の食べるおにぎりを、自分でつくりまします。昼間はそれぞれが請け負う仕事につくため、グループに分かれて行動します。行き先にコンビニがあるとは限らず、昼食準備は欠かせません。



2日目と3日目、わたしは日本リザルツというNPO 法人の方と一緒に、仮設住宅訪問に出かけました。一軒一軒訪問し、仮設での暮らしの聞き取り調査をする仕事をしました。聞き取り調査と言っても、事務的に調査項目を埋めるのではなく、傾聴を主体としています。昼間仮設におられるのは、たいてい高齢者か主婦の方でしたが、時々男性の姿も見られました。仕事のない男性は、昼間からお酒を飲んで引きこもってしまう人もいます。



これらの草の根の取り組みによって、生活改善のために必要な事があれば行政に伝えたり、問題を察知して専門家につないだりすることができます。行政や公的支援の及ばない範囲を、NPO やボランティア団体が地道に支えていることが分かりました。

留守宅も多かったのですが、訪問によって様々な声を聞くことができました。わたしたちを労って下さり、世界中からの支援に感謝される声がある一方、これからの生活に対しての不安の声も多く聞きました。当然のことながら、仮設では様々な人々がそれぞれの思いで暮らしておられ、決して十把ひとからげにできないのだと気付かされました。

また、はっとさせられる出会いもありました。ある三歳の坊やはトラックのおもちゃで遊んでいたのですが、「何を運んでいるの?」とたずねたわたしに、「がれき」と答えたのでした。幼子の口から出る「瓦礫」という言葉に、こちらが驚かされました。震災

の傷跡を感じさせた出来事です。その他に、たくましく商売を始めようと走り回っておられたおかみさん。途方にくれて、流されるままに日々を送っているおばあちゃん。行政に対する方針に苛立ちを感じている漁師の奥さん。津波を目の当たりにした恐怖を語ってくださったおばさん。戦中と今を重ね日本の将来を考えているおじいさんなど、これらの方々との出会いは、わたしに強い印象を与えました。まだ耳の内に温かな東北なまりの言葉の響きが残っています。

傾聴を始めて 2 日目に、わたしは強い疲労を覚えました。それは具体的には頭痛や吐き気になってあらわれました。背負いきれない困難を抱えておられる人々に実際に接し、耳を傾けることは容易ではないことを実感しました。けれども無力感や厭世観に足元をすくわれることなく、最後まで心の耳を傾けることができたのは、ベースで思い切り仲間たちと気分転換をしたこと、祈りの力を信じていたこと、休むことを心がけたおかげだったと思います。長期でボランティアに参加されている方も、途中休暇を取って休むことが勧められています。決して無理をしないという姿勢が、結局のところ実りある貢献につながるのだと思います。

4日目の作業は、写真洗浄と展示会のお手伝いでした。大槌町にあるパチンコ屋の廃墟を利用して、津波に流されたアルバムの展示会が常設されています。会場に入ったとき、すえたような臭いが充満していました。地面は土ぼこりがして、マスクをつけていないと気分が悪くなりそうでした。一日が終わる頃には眼がごろごろして、異物感を感じました。



## 写真の洗浄

汚れたアルバムから写真をはがし、刷毛で泥を落とします。こびりついた汚れは、ウエットティッシュでやさしくぬぐいます。劣化しているため、強くこするとたちまち色が落ちてしまいます。

この方々が無事でありますようにと、願わずにはられません。

洗浄済みの写真、または比較的状态のよかったアルバムを、項目ごとに分類して会場に並べています。写真から判別できた氏名は、全てリストアップし、入り口のボードに五十音順に掲載します。

被災者の方が来場され、思い出だけでも手元に残したいと、山のようにある写真の中から黙々と探しておられました。今は流されてしまった家、家族の写真、子どもの写真……。



これらの写真は自衛隊や瓦礫撤去に携わった方々が、ひろい集めて下さったものです。写真だけでなく、賞状や遺影、ランドセルなどもありました。来場される被災者の方はそれほど多くありませんが、じっと写真に見入っておられる姿が印象的でした。

地道な目立たないボランティアですが、全てを流され失った方にとって、見つかった一枚の写真が、その後の生活の拠り所となることがあるのではないかと考えさせられました。

活動の現場の行き帰りに、震災の爪あとを感じさせる場所をいくつか通りました。



上の写真は、海に見える堤防近くの住居跡です。鉄骨だけを残し、後は残骸になっています。左の写真は、舟が内陸部に残されています。港近くの場所です。下は瓦礫の山と、地盤沈下してしまった港。舟が横付けされているところが元の港。満潮時にはさらに海面下に沈んでしまいます。

座礁して、堤防にめり込んでしまった巨大な船。



これでも随分街が片付いて、復興の兆しをみせているそうです。震災時には瓦礫が二階部分にまで達していたそうです。写真の住居がその爪あとを物語っています。満潮時には、辺りから海水が染み出して来ます。もう人が住むことはおそくないでしょう。一見きれいに見える住居でも、内部は破壊し尽くされています。



上の写真は同じ場所を上空からとらえた4月1日の様子です。



最終日の活動は、再び仮設住宅訪問でした。そこで73歳のAさんとの出会いを通して、再生へ向けての希望を感じました。

Aさんは見るからに親しみやすい、明るい「おばちゃん」でした。震災前には花屋を営み、活力にあふれた日々を送っておられたそうです。しかし、そんなAさんでも、震災によって受けた傷は深かったのです。Aさんは津波により家を失い、商売道具を流され、親族の中でも若い二人が命を落とされました。一人は東京から来られたばかりの若いお嫁さんで、もう一人は未婚の娘さんでした。心に深い打撃を受けたAさんは、立ってられないほどの状態になり、仮設に移ってからも食べることも億劫で布団にもぐりこむ日々が続きました。仮設に訪れるボランティアや訪問客を疎ましく感じ、誰とも会わない毎日でした。

そんなAさんを立ち上がらせたのは、なんと、わたしと同じように仮設訪問をしていた高校生の女の子二人だったのです。この二人の女子高生は訪問によってAさんと知り合い、その後釜石を離れてからも、Aさんに「おばちゃんに元気になってほしい」と手紙を出したそうです。この手紙を受け取ったAさんは、「涙が止まらなかった」と言います。何度も何度もその手紙を読み返し、少しずつ「元気になる」と決意するに至りました。

わたしたちのように旅人に過ぎないボランティアでも、人と人との心の出会いは何かを実りをもたらすのだと教えられ、勇気をいただきました。同時に、苦しみや悲しみから立ち上がるには、周りの温かな支援と、何よりも本人の生きることへの決意が不可欠なのだと思い知らされました。結局のところわたしたちにできることは、本人に代わって問題を解決することではありません。苦しみの淵にある人々に対して、ヨブの友人のように理論で諭すことは何ら意味がないのだと思います。結局のところわたしたちにできることは、苦しみにある人々の内なる戦いに敬意を払いつつ、時にはその呟きに共感の耳を傾け、その人の上に希望の明日が来ることを信じ共にいること—それだけしかないのではないかと思います。

どんな悲惨な現実にあっても、信仰者は希望を神様に見出します。釜石のベースキャンプにある、言い表しがたい明るさは、信仰の光がもたらす希望から来るのだと思います。ここに来てボランティア活動に身を投じる信仰者も、信仰者でない人々も、共に教会にあるベースキャンプという共同体の体験から光をいただいています。わたしたちはその光を胸に秘めて、苦しむ人々の元に派遣されたのだと思います。貴重な経験をさせていただいたことを、感謝しています。